

第1章 特集の概要と今後のまちづくりのポイント

平松 徹

中小企業診断協会 東京支部

1. まちづくり特集の概要

東京支部まちづくり研究会では、まちづくりに携わっていらっしゃる方をお招きして講演をしていただき、それをもとにした議論などを通じてまちづくりについての研究をしてみました。今回のまちづくり特集は、その研究会での成果を中心にしています。また、個人的にも各人がまちづくり研究を進めてまいりましたので、その成果も書かせていただきました。

今回の特集の流れは、以下のとおりになります。

第1章は、平松がまちづくりについてポイントになる考え方、「ホスピタリティ」、「持続可能な開発」、「公の意識」そして最後は「想い」であることをまず書きました。

第2章は、河合陽子会員がまちづくりにおいて商店街も主人公の1人となること、第3章は、鈴木隆男会員があるべきリーダー像、組織モデルについて書きました。第4章は、遠藤健会員が公民連携の重要性、第5章では、当研究会鹿倉克己会長が都市計画事業について、最後に第6章では、馬場聡会員が全体的なまとめも含めてまちづくりのチェックポイントについて書かせていただきました。

そして、最後が討論会の記事です。ま

ちづくりは多様です。さまざまな角度からまちづくりについて討論させていただきました、掲載いたしました。諏訪弘安会員と河島孝会員が編集を担当いたしました。

今回の特集では、さまざまなまちづくりがあるなかで、中小企業診断士としてどのようにまちづくりにタッチできるのかをポイントに書かせていただきました。この特集を読まれた診断士の方が、実際のまちづくりの支援活動に、今回の記事の内容を活かしてほしいとの願いからです。ご参考にしていただければ幸いです。

2. まちづくりについてのまとめ

今回まちづくり研究会で研究した成果を、「よいまちづくりとは…」として1つの図表にまとめました。まちづくりの目的が「住みよいまち」、「また来たくなるまち」、「賑わいのあるまち」であり、ポイントになる「コミュニティ性」、「界索性」、「環境」などの要素、そしてまちづくりを考えるときにぜひとも必要とされる「ホスピタリティ」、「持続可能な開発」、「公の意識」、そして最後はそれぞれのまちに対する「想い」が決め手になることを表にしました。

3. まちづくりに欠かせない「ホスピタリティ」、「持続可能な開発」、「公（おおやけ）の意識」

まず、まちづくりについての大切な考え方

図表1 よいまちづくりとは…

まちづくりの目的	ポイントになる要素	例えば…	誇りが持てるまち
住みよいまち	コミュニティ性	「コミュニケーションがある」、「ぬくもり感がある」、「居場所がある」 「高齢者に優しい」、「祭りで盛り上がる」	
	インフラ（住環境整備、社会資本整備）（公共の役割）	「交通網」（電車・バスなど）、「教育・健康関連施設」（学校・病院など） 「公共施設等」（文化会館、公園など）、「ユーティリティ」（電気、水道など）	
また来たくなるまち	環境	「安心・安全」、「清潔」、「気持ちのよい並木道があるまち」	
	景観	「風光明媚なまち」、「川のせせらぎがあるまち」、「海岸線が素敵なまち」	
	歴史	「歴史があるまち」、「お城がランドマークのまち」、「古戦場の跡のまち」	
賑わいのあるまち	賑わい（経済性、豊かさ） 界隣性	「まちおこし」、「村おこし」、「食おこし」（ラーメン、焼酎など） 「地域通貨」、「祭りで盛り上がる」、「細街路」	

についてです。「ホスピタリティ」、「持続可能な開発」、「公（おおやけ）の意識」の3つです。

4. まちづくりに必要な考え方はまず「ホスピタリティ」

まず「ホスピタリティ」、もてなしの気持ち。まちには居場所が必要です。住む人にとっても、外から来た人にも、ホッとできるところがまちには欠かせません。もてなしの心で接すれば、そこには間違いなく居場所ができます。

ホスピタリティと大きさに考える必要はありません。まちづくりのなかに込められたちょっとした配慮がホスピタリティです。たとえばまちに来た人が困ることにトイレの問題があります。用を足したいのだが近くにない。そんなときパチンコ屋があると私など何食わぬ顔で使わせてもらいます。我慢できないので申し訳ないとの気持ちより、生理現象が優先します。

来た人に物を売ろうではなく、来た人がどのようなことを望んでいるかを考え、実行に移すことが大切です。商店街ならその役割をうまく果たせる。たとえば次のような事例です。

事例1 商店のトイレをまちに来た人にも使ってもらっている小樽の商店街
北海道の「小樽の都通り商店街」では

平成9年5月に「街角ふれあいトイレ」事業をスタート。17店が呼びかけに応じて、自店のトイレをまちに来た人にも使ってもらっています。商店街はトイレトーパーを補給しています。まちに来た人に対する商店街の気配りの例です。

「ホスピタリティ」は私のまわりですと、私の自宅から3軒隣の人が自分の家の前に花をたくさん植えていることが該当します。前を通るととてもさわやかで感じがよいですね。診断士のあなたも自分のまちでの「ホスピタリティ」について確認してみてください。

5. まちづくりには地域資源を活かした「持続可能な開発」が大切

持続可能な開発も大切です。豊かな経済ばかりを目指して過剰な開発に走るのではなく、広く世界をみて、また後の世代を考へて環境負荷に配慮した抑え気味の開発が大切です。

郊外にショッピングセンターをつくれれば、車で行くしかありません。必然的に二酸化炭素を撒き散らします。問題は郊外にショッピングセンターをつくるのが「よいまちづくり」になるのかどうかです。「暮らしやすいまち」であることは確かです。そこに行けば、だいたいなんでも揃います。食べ物、飲み物もふんだんにあります。映画も観られますし、遊ぶところにもこと欠きません。確かにそこには快適な世界があります。

しかしよいまちには深い感動が必要です。心を打つものがないといけない。人をひきつけるマグネットのようなものです。人工のまちには少しはありますが、かなり底の浅いものです。歴史がないのですから仕方ありません。

「地域資源」を活かしたまちづくりが持続可能な開発に結びつきます。たとえば「お祭り」はかなり有力な地域資源です。お祭りを活かせば、程度の差はありますがまちは活性化します。そして持続可能という意味でまちづくりが効率よく果たせます。

私の住んでいるまちですと、自宅前の桜通りが持続可能な開発の核になる地域資源です。あなたのまちはどうですか。そこからまちづくりへの関与をスタートしたいですね。

6. コンパクトシティがよい

コミュニティを考えるときには、コンパクトシティという発想が大切です。ヒューマンスケールといいます。やはり歩いていける距離を基準にしたまちづくりが大事です。歩くのと車からみるとではまちに触れるときの「質」が違います。やはり自分のリズムでまちを感じなければ感動はない。まちに回遊性が必要な理由です。

回遊性のあるまちなど、ショッピングセンターには逆立ちしても実現できません。回遊性は人間の頭で考えつく範疇を超えています。お釈迦さまの手の向こうにあるというのでしょうか。

7. 自転車を使うのは持続可能な開発そのもの

事例2 自転車を有効活用しているアムステルダム

オランダのアムステルダムでは自転車が盛んに乗られています。自転車道が車道、歩道とは別にしっかり整備されています。大きな駅のなかに自転車が入ることもできます。なんととっても自転車は環境面では優れています。まずCO₂を撒き散らしません。健康づくりにもよい。

持続可能な開発のよい事例です。



環境にやさしい自転車がメインの交通手段
(5月のアムステルダム)

8. 「公の意識」がまちづくりには欠かせない

また「公の意識」がまちづくりには欠かせません。まちは皆のものです。自分の土地だから、自分の建物だからといって勝手にして良いわけがありません。

まちづくりの背後にある都市計画を確認することが大切です。100年ほど前に江戸を訪れたイギリス人のオルコットは「世界で一番美しいまち江戸」と絶賛しました。しかし今日の東京を眺めてみると、確かに皇居や神宮の森は美しいが、高速道路に高層ビル、中層ビル、看板の林立…。秩序があるのかないのかとにかくバラバラで、それぞれ勝手に自己主張しています。それも商売上の…。ちよっと情けなくなります。そして寂しくなります。そこには自分の都市、まちへの想いがほとんど感じられません。日本には都市計画がそもそもないのでしょうか。

9. 日本のまちづくりに欠けているのは「畏敬」の念

事例3 ランドマークを超える建物は建てない不文律が守られている欧米の事例
イタリアのフィレンツェの「サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂」。まちで道に迷ったらこの大聖堂を目印に行動すればよいといわれます。実際、この大聖堂の尖塔以上に高い建物はありませ

ん。まちなかのいたるところから見えます。ランドマークを超える高さのものはまちなかに建てないとの不文律が確実に守られています。

欧米には「畏敬」の念が残っています。畏敬とは恐れ敬うことです。戦後の日本に大きく欠落しているのはこの「畏敬」の念ではないでしょうか。

10. 日本人は「公」はあまり意識しない

「公（おおやけ）」の考え方が欧米と日本では違うということです。都市景観は「公」の範疇に入ります。家のなかは私的な空間なのでどのようにつくろうと勝手なのは日本も欧米も一緒です。しかし、外観はそれぞれの建物も都市景観の一部を構成しているので「公」の範疇になります。やはり周りに配慮した外観にすべきです。日本の建物や看板は、一様にそれぞれが自分勝手に言いたいことをいっている駄々っ子の感があります。建物や看板が都市景観にはお構いなしに自分だけをPRしています。日本人は「お上」は気にするが、「公」はあまり意識しません。

私のまちでは公の意識を探してみるとたくさんある公園を公共施設として大切に使うということになるのでしょうか。やはり「公」の意識は少し弱いですね。皆さんのところはいかがでしょうか。

11. 結局、想いが大切

そして、最後に大切になるのはそれぞれの人のまちに対する想いです。想いがあるからコツコツと努力もできます。さまざまな考え方の人がいますから、地道に話し合うことがさまざまな場面で必要になってきます。それを後押しするのは想いの強さです。

事例4 ドナウ川に架かる橋をすべて破壊されたが、元どおりに復元したブダペストの事例

第二次世界大戦の末期ですが、ドイツ軍がブダペストから退却するときドナウ

川に架かるすべての橋を爆破してしまいました。

戦後、自由橋、マルギット橋、鎖橋、ベティーフ橋は元のように再建されました。ヨーロッパのまちではよくあるのですが、歴史的な建造物を大切にしているから壊されたら元のように復元します。破壊されたらその破片をひとつひとつ丁寧に拾い集めて元どおりにします。伝統的なものに対する思いと実行力がないとできません。「地域資源」を徹底的に大切にしているということです。

欧米がすべてよいわけではありませんが、これからの時代では特に地域資源を大切にすることが必要になります。ぜひとも学びたい考え方であり行動です。

以上、まちづくりに大切な考え方を見ました。診断士がまちづくりにタッチするときにはぜひこれらの考え方を基本にして仕事をしていくことが必要と思います。

平松 徹

(ひらまつ とおる)

上智大学文学部哲学科卒業後、空調機販売会社に勤務。経営管理、営業規格を担当。その後ビジネススクールでマーケティング、財務、人事労務、リスクマネジメントの講師を担当。1998



年に ISO、人事労務のコンサルタントとして独立開業。その後会社組織にし、現在社会保険労務士、行政書士業務を併せ持つ、企業にトータルな経営支援を提供する㈱ソフィア代表取締役所長。著書に『ダントツ重要部門になる総務経理の基本実務』（中経出版）『これでわかる会社の見える化と攻めの内部統制』『中小企業のための業務改善マニュアル』（週刊住宅新聞社）など。中小企業診断士、社会保険労務士、品質 ISO 主任審査員、環境 ISO 主任審査員。